

と、申し合わせたように消滅してしまい、数分間、部屋全体を完全な漆黒が支配する。そしてその後、原始宇宙での星の生誕よろしく、光の再生の場面が、ゆっくりと進行する。その有り様に立ち会えた観客に幸いあれ。

深い青の闇、それはあるいはパドヴァのスクロヴェーニ礼拝堂のジョットの壁画への賛歌か。それを安易に曼荼羅と呼ぶ誘惑は避けたい。だが思えば、外に広がる会場でも、より集まったアーティストたちは、お互いに申し合わせることもなく、本人たちも意識しないままに、ある意味のネットワークを編みあげてしまう。近くのアメリカ合州国館で、アン・ハミルトンが、壁面上部の隅からピンク色のチョークの粉末を、白壁のうしろに降らせている。会場の壁ぞいの床にはピンクの粉末が、砂時計のように堆積してゆく。かと思えば傍らのベルギー館（アンナ・ヴェロニカ・ヤンセンス、ミシェル・フランソワ）からは白い水蒸気が立ちのぼり、館内は乳色の霧に包まれて、視野の彼方に観客がシルエットで出現する。別会場のアルセナルの巨大な兵廠庫の奥では、一千個の時計が一分に一度、カチ、と一斉に分針を進め、かえって宮島の空間と比べて、藝のなさを露呈する。光の鼓動に代わって、音の鼓動を響かせたのは、Jue Chang「絶唱」（陳箴Chen Zhen）。大小様々の椅子や机の裏に革が貼ってあり、観客は我がちにパーカッションの創作に熱中する。最初の一瞬こそ目につく多くの奇抜な自己顕示作品が、会場で相殺しあうなか、堆積する時間の重さや、たゆたう雲の軽さとも無縁に、また、ビデオ作品のように時間的強制を観客に強いることもなく、一瞬のうちに永劫回帰の往還の相をも示唆した宮島の空間は、不思議ななつかしきで観衆の記憶に留まっていた。

「無明長夜の燈火なり／智眼くらしとかなしむな／生死大海の船筏なし／罪障おもしとなげかざれ」。親鸞のそんな言葉が、ふと口から漏れていたのも、思えば不思議な体験だった。

## 連載④ 勝負の一瞬と持続への欲望と

第48回ヴェネチア・ビエンナーレ見物雑感

国際日本文化研究センター研究員、総合研究大学院大学助教授、稲賀繁美

最初の一瞬で勝負は決まる。あとは観客の関心をどれだけ永続させ、どれだけ深い印象を刻みこむか。だ。予備知識もないまま、4年振りでヴェネチア・ビエンナーレ会場を訪れた。板倉準三設計の日本館の白壁には、今やうっすらと緑なす苔が覆っていて、国際様式の古びを思わせる。やや導線が分かりにくい入り口を辿った末、展示室に入る。一瞬何も分からなくなる。溢れる陽光から突然暗黒の世界に連れ込まれた目が戸惑っているうちに、壁面は深い青を湛えて点滅を始める。よく見ると青みがかかったデジタル液晶表示装置が、壁一面を覆っていて、それらが一見お互いに関係もなく、数字をカウント・ダウンしたり、停止したり、消滅したりしている。そうか宮島達男が選ばれたのだ。とかすかな記憶が蘇る。

テクノロジー・ニッポンによる、東洋の瞑想と幽玄の美学。この企画が、国際様式への追従か、それとも日本美学への回帰か、といった数年前の不毛な論争を止揚した、などと野暮は言うまい。だが訪れた観客たちは、最初の驚きが去ると、やがて黙りがちになり、空間に吸い込まれたように立ち尽くし、そのうち何人かは床に座りこんでしまう。ほかの会場では見られない光景だ。液晶の数字はけっして目にちらつかぬだけの控えめな姿で、最初はそこに数字が刻まれているとも分からない。これは目の不自由な鑑賞者向けの作品だ。筆者は、近眼鏡をはずしてピンボケで眺める僥倖を得た。こうすると壁を覆った弱々しい光源は、微妙に光度と色合いを違えながら、ひとつひとつが息づき、語りかけてくる。やがて心が落ち着き、呼吸がなだらかになってゆくの分かる。心臓の鼓動のような点滅は、全体でそれと分かる交響もないまま、ひとつの宇宙との交信を確信させる。網膜には、補色のせいで紫の残像が浮かびはじめ、沈黙の世界は、生命の多様性と、その隠された相互依存を実感させる。2時間たらずのプログラムの回帰点で、すべての灯は、ふ